

【1】共通評価項目・内容

評価項目	評価内容	現状の 学校配置	現状維持案	小中学校案1	小中学校案2
				統合後の敷地	
				郡小及び倉小	二中
1. 適正な学校規模の確保	①各学校の学校規模	○	○	×	×
2. 良好な教育環境の確保	①小中一貫教育への適応	△	△	◎	◎
3. 立地条件等	①通学距離	○	○	○	△
4. 学校と地域コミュニティの 関連	①コミュニティ施設としての機能確保	○	○	△	△

【2】学校統合する場合の評価項目・内容

評価項目	評価内容	小中学校案1	小中学校案2
		統合後の敷地	
		郡小及び倉小	二中
2. 良好な教育環境の確保	②学校の敷地面積 ^{※1}	○	○
3. 立地条件等	②学校周辺の施設活用	×	×

※1 学校の敷地面積の評価については、統合した学校の敷地面積に対する評価。

【1】共通評価項目・内容の評価基準

評価内容	◎ : 特に望ましい状態	○ : 望ましい状態	△ : 改善可能な課題がある状態	×
1-① 各学校の学校規模	将来(平成52年度)にわたって、適正な学校規模を確保できる見込みであり、児童生徒数の増加が見込まれる。	将来(平成52年度)にわたって、適正な学校規模を確保できる見込みである。	将来(平成52年度)、適正規模を確保できない見込みの学校がある。	適正規模でない学校がある。
2-① 小中一貫教育への適応	小学校と中学校が隣接、または、同一敷地内にあり、教職員や児童生徒の移動がしやすい。	小学校と中学校の距離が1km未満で、比較的教職員や児童生徒の移動がしやすい。	小学校と中学校の距離が、1km以上2km以内で、比較的教職員や児童生徒の移動がしにくい学校がある。	小学校と中学校の距離が2kmを超え、教職員や児童生徒の移動がしにくい学校がある。
3-① 通学距離	基本となる通学距離の範囲内であり、かつ現状よりも通学距離が短くなる地域が多い。	学校規模適正化基本方針で定めた基本となる通学距離の範囲内である。	学校規模適正化基本方針で定めた許容範囲内の通学距離である。	学校規模適正化基本方針で定めた通学距離の許容範囲を超える通学距離となる地域がある。
4-① コミュニティ施設としての 機能確保	地域拠点として、地域住民の学校活用が現状以上の頻度で可能と見込まれる。	地域拠点として、地域住民の学校活用が現状と同程度の頻度で可能と見込まれる。	地域拠点として、地域住民の学校活用が現状以下の頻度になると見込まれる。	地域拠点として、地域住民の学校活用ができないと見込まれる。

【2】学校統合する場合の評価項目・内容の評価基準

評価内容	◎ : 特に望ましい状態	○ : 望ましい状態	△ : 改善可能な課題がある状態	×
2-② 学校の敷地面積	市立小中学校の1校当たりの、平均敷地面積(20,097㎡)の120%(24,116㎡)以上の面積。	市立小中学校の1校当たりの、平均敷地面積(20,097㎡)の80%(16,078㎡)以上、120%(24,116㎡)未満の面積。	市立小中学校の1校当たりの、平均敷地面積(20,097㎡)の80%(16,078㎡)未満の面積。	小・中学校設置基準(平成14年文部科学省令)に定める校舎・運動場面積が確保できていない。
3-② 学校周辺の施設の活用	教育環境の向上に資する公共施設等が、すべての学校に隣接している。	教育環境の向上に資する公共施設等が、すべての学校に近接している。	教育環境の向上に資する公共施設等が、いずれかの学校に隣接又は近接している。	いずれの学校の周辺にも、教育環境の向上に資する公共施設等がない。